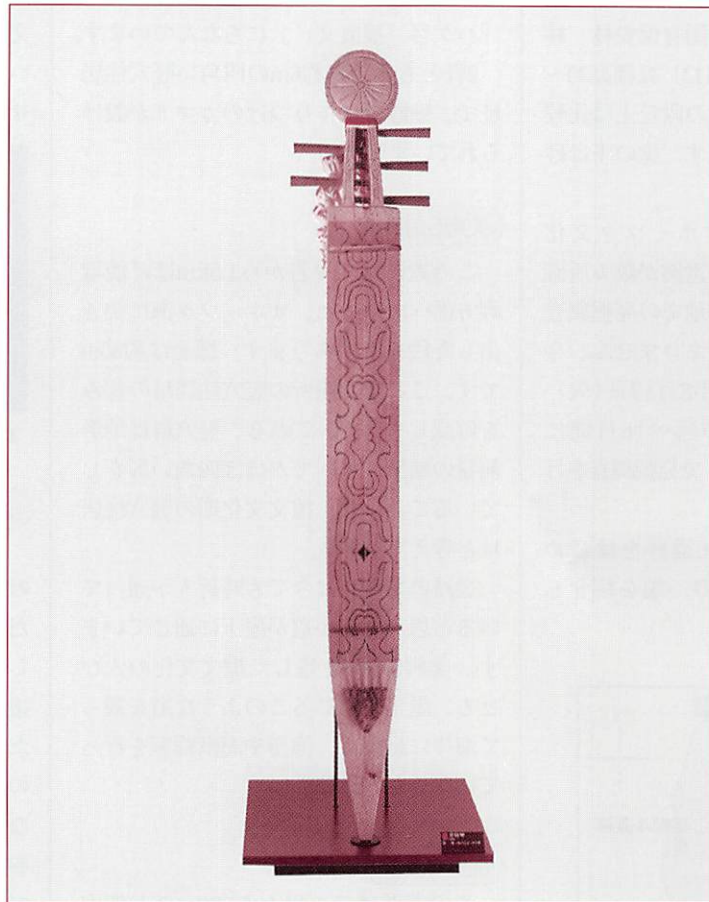


北方民族博物館だより No.52

目次 CONTENTS

- | | | |
|---|-----------------|---|
| 2 | ロビー展
講座 | 発掘速報展
発掘資料解説&整理 |
| 3 | シンポジウム
コンサート | 第18回北方民族文化シンポジウム
国際音楽の日記念フェスティバル 2003 in 北海道 |
| 6 | 季節の催し | 北の食フェスタ |
| 7 | ロビー展 | ウイльта刺繍展 |
| 8 | INFORMATION | |



E1274 サハリンアイヌのトンコリ（五弦琴）（136.4cm）
金谷栄二郎氏製作

今号の表紙はサハリンや北海道の宗谷地方でみられた、アイヌ語で「トンコリ」と呼ばれる弦楽器である。弦の数は5本のもが標準とされているが、3本のものや6本のものもある。トンコリの名称は日本の琴の音の擬声音「トンコロリン」に由来するという説、満洲語の「テンゲリ」（三弦琴）から派生したとする説などがある。本来はシャマンが所有する祭具のひとつと考えられているが、後に娯楽の一つ、あるいは教養の一つとしてサハリンアイヌの老若男女だれでもが演奏した。

全長は約120cm、幅10cm、厚さ5cmの大きさで、トドマツやイチイなどを削りぬいて共鳴胴を作り出し、その上に板を張り、クジラ、シカの腱やイラクサの繊維などで作った弦を張る。胴の表面下部の、弦をしぼる部分にはアザラシの皮を張る。トンコリは左肩に立てかけたり、横抱きにして両手の指先で弾いて演奏された。

トンコリの表面中央の孔（トンコリ・ベツ）には、ガラス玉（トンコリ・ラマトフ）等が入れている。また、トンコリの各部名称は、頭、首、耳、耳の穴、肩、胸、背中、腹、腰、下腹部、足、へそ穴、陰部、陰毛、陰門、臍穴など、人体名称がついている。へそ穴から入れられたガラス玉は、トンコリの魂とみなされている。これはトンコリが生き物で、その発する音は声であるという考え方に基づいている。従って、トンコリが古くなって使えなくなっても、そのまま捨てることなく、お供え物をして木の根株のそばなどに置き、丁寧な送り儀礼を行った。



北海道立北方民族博物館

Hokkaido Museum of Northern Peoples

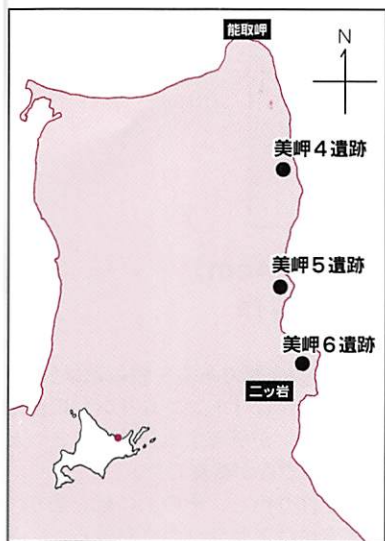
調査による経緯

平成7年から平成9年まで、当館では能取半島に位置する遺跡の発掘調査を行ってきました。

能取半島は、オホーツク海と能取湖に挟まれた海岸段丘からなる台地です。能取半島の東部海岸沿い（国有保安林 林班101・109・123・111・113）は標高30～50mほどの海岸崖で、その段丘上は比較的緩やかに傾斜しています。崖の下は砂浜や岩礁となっています。

この地域一帯にはオホーツク文化、まつもん擦文文化、アイヌ文化の遺跡が数カ所確認されていましたが、実地での発掘調査が行われた事例は多くはありません。今年度、当館では平成15年8月19日(火)から9月5日(金)までの延べ16日間にわたって、「美岬6遺跡」で発掘調査を行いました。

本ロビー展では美岬6遺跡をはじめ、過去に行った調査成果の一端を紹介しました。



遺跡地図

美岬4遺跡

この遺跡は網走市二ツ岩から3kmほど能取岬方面へ向かった、2筋の小沢によって囲まれた段丘上にあります。標高

は約50mです。ここで擦文文化期の竪穴住居址を2軒確認しました。

擦文文化は7世紀から12・13世紀にかけて、東北地方北部から北海道全域、およびサハリン南部や千島列島において展開した文化で、名前の由来は土器表面の「ハケ目（擦痕文）」にちなんでいます。

2軒とも一辺が約6mの四角い竪穴住居址で、壁際には作りつけのカマドが設けられていました。

美岬5遺跡

この遺跡は二ツ岩から1.5kmほど能取岬方面へ向かった、オホーツク海に突き出した段丘上にあります。標高は約50mです。ここで11箇所の竪穴住居址の窪みを確認しました。これら、竪穴群は地形測量の結果、すべてがほぼ四角い形をしていることから、擦文文化期の竪穴住居址と考えています。

遺跡の北側には今でも時折人が通っていると思われる小道が崖下に通じています。美岬5遺跡を残した擦文文化の人も、崖下に通じるこのような道を通って海岸に出向き、漁撈や海獣狩猟を行っていたかもしれません。

美岬6遺跡

この遺跡は二ツ岩から500mほど能取岬方面へ向かった、2筋の小沢によって囲まれた段丘上にあります。標高は約40mです。ここで続縄文文化期の竪穴住居址を1軒確認しました。

続縄文文化は、弥生文化と時期的に並行していますが、それとは異質の文化です。九州から東北地方南部までの地域に展開した弥生文化は、大陸からもたらされた金属器と稲作の技術によって、縄文文化以来の狩猟・漁撈・採集による食糧生産から、稲作を中心とした食糧生産に移行します。それに対して、東北北部から北海道にかけて展開した続縄文文化は、金属器の使用は認められるものの、

依然として狩猟・漁撈・採集による食糧生産が「続いて」いました。よって、弥生文化に並行するこの地域の文化を続縄文文化と呼びます。

この竪穴住居址は一辺が8m、延べ床面積が64㎡と大型で、床面からは続縄文文化に特徴的な切る、剥ぐ、削るといったナイフとスクレイパーの機能を併せ持つ石器や、土器が出土しました。



美岬6遺跡竪穴住居址

講座

10月4日に行った講座では、発掘資料の解説と一部資料の整理を手伝っていただきました。土器の模様や形をよく観察し、バラバラになっている土器の破片の接合や文様の拓本をとっていただきました。資料の整理はとても時間がかかるもので、また根気も必要です。短時間ではなかなかうまくいかないようでしたが、参加いただいた皆さんは熱心に取り組んでおられました。



※ ※ ※

当館では、今後も網走管内を中心とした発掘調査、測量調査を行い、随時公開していきたいと考えています。

(学芸課 角 達之助)

第18回北方民族文化シンポジウムでは、「北太平洋沿岸の文化—文化接触と先住民社会—」をテーマに各地域における先住民社会との接触のあり方について検討しました。如何にその概要を報告します。

第1部 カムチャツカをめぐる座長 岸上伸啓(国立民族学博物館)

◆大島稔(小樽商科大学)

産業化と集住化がもたらしたコリヤーク社会の変化



ソビエト化の過程で起きた産業化と集住化がカムチャツカの先住民社会に多大な影響を与えた。先住民社会の文化接触として4つの出来事をあげることができる。第一に1697年～1699年のアトラソフ隊の探検・踏査で、先住民ははじめて帝政ロシアという異文化に接触した。帝政ロシアは毛皮税を先住民に課したため、トナカイ飼育、狩猟、漁撈の伝統的生業の構成に変化が生じ、罽獵と交易の比重が大きくなり、またヨーロッパからビーズ、鉄製品、布製品、茶などの外来の物質文化がもたらされたことがあげられる。第二には、ソビエト化の過程で、私有財産とみなされたトナカイが没収され、公有化・国有化されたこと、さらにトナカイ飼育、漁撈、狩猟の伝統的生業が産業化され、それに伴いトナカイ飼育をする遊牧民を定住させたことがあげられる。第三に、ソ連時代に産業の経済効率化のため、村を廃止し、新しく建設した村に強制的に移住させ、集住化したことをあげることができる。第四に1986年のペレストロイカ以降の国営農場(ソフホーズ)の廃止にともなう私企業化と経

済の混乱があげられる。

第二次大戦により戦中需要が増大し、漁業コルホーズ(集団農場)、トナカイ飼育コルホーズともに漁獲量、飼育頭数が増加する。労働力不足が続き、カムチャツカ外からの労働者の流入が多くなる。1950年代多くの漁業コルホーズが閉鎖され、改編が行われる。トナカイ飼育よりも先に統廃合の大規模化が生じている。各地域には近代的な町が作られ、さまざまな公共施設や集中暖房、給水、および発電施設が整備され、近隣の町を統合し集住化が進められた。1926年の村落数122から1998年の統計では、22までに減少した。また、1960年代になるとトナカイ飼育規模の拡大が始まり、トナカイの再生産管理は、より厳しくなった。経済効率化のため、コルホーズの統廃合が進み、ソフホーズによる大規模化がはかられた。しかし、その後、コルホーズはソフホーズへ統合され、それまでの村は閉鎖され他の村へ移住を余儀なくされた人たちも多かった。

こうした定住化と集住化により家族主義が崩壊し、生態の観察と経験が必須の伝統的飼育技術の伝達・教育が阻害された。そして、ペレストロイカ以後も蓄積された問題の解決策は講じられていないなかで、トナカイ飼育は基幹産業ではなくなっている。

◆ユリアO. ノビック

(カムチャツカ教育大学)

「ロシアとの文化接触によるコリヤーク服飾文化の変容」



本発表は文献資料をもとに過去と現在のロシア人とコリヤーク民族との経済

的、政治的、文化的関係の背景のなかで北東カムチャツカにおけるコリヤークの衣類の地域的な変化の概要を示すことである。それらは2つの地域的なタイプ、アリュートル地域タイプとカラガ地域タイプに代表され、衣類のさまざまな要素について変化が生じた。素材からみるとロシア人との接触、毛皮税の賦課によって衣服に利用する毛皮が変わった。衣類の名称もロシア語が取り入れられ、またコリヤークの衣類にロシアの衣類の影響がみられる。例えば「コフリヤンカ」は伝統的なコリヤークの衣類の要素であるフードを持つとともにエプロンと両脇の「まち」をもつ「カフタン」と呼ばれるロシアの衣服とが合体したものである。さまざまな糸や布がロシアばかりでなく中国など周辺地域から輸入され、色彩豊かな刺繍として利用されたが、ロシア式の縫目の影響はあきらかである。国内および国外市場で高価に取引される毛皮から丈夫なトナカイやアザラシを利用する方向へと衣類の素材の美的価値観を転換した。

第2部 ワークショップ

座長 岸上伸啓(国立民族学博物館)

◆アレクセイ P. アポロン(コリヤーク伝統文化伝承者/カラガ地区先住民共同体連合会長)



私はかつて自分が生まれ育った村の、伝統的な半地下式住居における暮らしの記憶(5歳であった1958年当時の)を失っていない。暮らしは漁撈、毛皮獣狩猟、海獣狩猟のかたわらトナカイ飼育も行っていた。その後、先住民は伝統的な村から新たな村への移住を余儀なくされた。自分たちは生まれた村からレキニ

れた。自分たちは生まれた村からレキニキへ、さらに人びとはレキニキから1980年にオッソラやティムラットあるいはほかの村へと移住した。そしてペレストロイカも災難である。市場経済への移行によって先住民は傷つき、先住民団体はこうした状況を改善し権利を守る為に設立された。私たちは自然保護などを目的とした補助金などを得て現在の危機的状況に立ち向おうとしている。

アポロン氏は、以上の口頭発表の後、カムチャツカのコリヤークが伝統的に漁撈に使用してきた手網の組み立て方と使用方法について実物をもとに解説された。この手網はW. ヨヘルソンも記載しているが、木の自然な曲がりを利用した独特の形状の枠と取っ手に網を取り付けたものである。

第3部 文化接触の要素

座長 谷本一之

(北海道立北方民族博物館)

◆岡庭義行 (帯広大谷短期大学)

アラスカ・チムシアンにおける文化接触



チムシアンは、カナダ・プリティッシュ=コロンビア州のスキーナ川、ナス川流域に居住する、狩猟・漁撈・採集活動を生業とする北西海岸インディアンの社会集団の一つである。アラスカ・チムシアンは19世紀末に、アラスカに移住したチムシアンの一部である。アラスカ・チムシアンという新たな集団の形成には英国国教会の宣教師ウィリアム・ダンカンの影響が大きい。

ダンカンチムシアンに対して、彼らの首長制やクラン(外婚制母系氏族)、トーテム(ワタリガラス・タカ・オオカミ・シャチ等の紋章をもつクラン)などを基調とする社会構造を徹底的に廃し、平等な社会とキリスト教の普及に努め

た。これまでの現地調査や文献資料の整理・検討から、結果的にこのダンカンの活動は失敗に終わったと思われる。しかし、中にはダンカンに従い、キリスト教に改宗し、アラスカへ移住した一部のチムシアンもあり、彼らがアラスカ・チムシアンを形成した。

アラスカ・チムシアンはアラスカ州南部のアネット島を"reservation (特別保留地)"として獲得して以来、現在に至るまでこの地で生活している。彼らはダンカンの指導の下、従来の生業活動を廃止し、製材工場、水産物加工工場を建設し、貨幣経済への参入を果たした。また、個人的な利益の追求ではなく、共同体による利潤管理を行うといった社会生活へと移行した。

アラスカ・チムシアンは先住民であると同時にアラスカへの移住者でもある。その意味では、アラスカに土着している他の先住民とは性格を異にしており、そのことが彼らを「先住民であり、先住民ではない」という錯綜した立場に置いている要因であると思われる。

◆オルガ ムラシュコ

(モスクワ大学人類学研究所)

今、カムチャツカで—先住民社会の試練—



ロシアの政治や経済がいかに先住民に影響を与えてきたかを紹介する。かつてカムチャツカの各河川にはそれぞれ集落があった。100以上の集落にそれぞれ200人くらいの先住民が生活していた。現在、カムチャツカの先住民はかつて住んでいた川や集落へのノスタルジーを抱いている。

かつては15000人あまりの定住的な先住民、イテリメン、海岸コリヤーク、そして500人あまりのアイヌである。19世紀初めに伝染病のために多くの先住民が

亡くなった。1926年に各民族は自分たちの民族名を失い、移住や民族の言語を使うことが禁止され、さらに寄宿学校は伝えるべき伝統文化を子どもたちから奪った。また、カムチャツカの先住民は富農とされ1900人余の先住民が弾圧された。

今日でも課題は残されている。さまざまな民族と一緒に生活することによって新しい民族文化が生まれている。民族的な民芸品が各村で作られているが、紛い物が流通している。先住民の著作権を擁護する法律が整備されていないのである。自然資源の利用の面でも先住民と町にすむ非先住民とは対立している。非先住民の意志を反映する行政と先住民は毎年、自然資源をめぐる狩猟場や漁場、採集の場をめぐる対立している。多くのハンターや漁業者が町から出かけて行って狩や漁に励んでいる。そこはほんの少し前まで先住民が利用していた場所なのである。こうした猟区や漁区は、現在ツーリズムの場としても利用されている。

◆岩崎・グッドマン まさみ

(北海学園大学)

文化と商業のはざままで



「文化」としての資源利用・管理と「商業」としての資源利用・管理は対立項として捉えられることが多い。捕鯨問題においても、「文化」としての「先住民・生業捕鯨」と「商業捕鯨」は対立するものとして捉えられ、この枠組みの中で捕鯨問題は議論されているが、そこには矛盾と現実とのギャップが存在する。

日本の小型沿岸捕鯨を例として考えてみたい。日本は古くから、全国的にクジラを利用する伝統を持っており、地域差が存在する。従って、日本の捕鯨は先住民の捕鯨文化に近似する「文化」として捉えることができるが、国際捕鯨委員会

は小型沿岸捕鯨を「文化」とは認めず、「商業」として位置づけ、捕鯨の再開を未だ認めていない。日本政府や文化人類学者は商業捕鯨が禁止された1982年以来、多くの議論を重ねた結果、日本の小型沿岸捕鯨は「先住民・生業捕鯨」と「商業捕鯨」双方の要素を併せ持つ新たなカテゴリーとして分類すべきであると主張するが、国際捕鯨委員会はあくまで、小型沿岸捕鯨を「商業捕鯨」として位置づけている。しかしながら、商業性を完全に廃した「先住民・生業捕鯨」もまたあり得ないことから、「先住民・生業捕鯨」と「商業捕鯨」という二項対立的な概念では捕鯨問題は解決できないと思われる。

むしろ、今後は鯨という資源を如何に管理するかを議論するべきで、資源を誰が、何の目的で利用するのかを問題にすべきではないのではないか。つまり、先住民・非先住民の枠組み、商業性、非商業性の枠組みをとりはずして資源管理の新しい枠組みを考える姿勢が必要なのではないか。

◆渡部裕（当館学芸課長） カムチャツカにおける漁業と先住民 社会—日本人のはたした役割—



日本人がカムチャツカで漁業を始めてから（最も古い事例は函館の貿易商がサケを買いつけて輸入した記録で1899年のこと）、その終焉を迎えた1945年8月までのおよそ50年間にわたる「日本人漁業時代」の歴史の中で、日本人とカムチャツカ先住民が接触する機会は少なくなかったと思われる。

日本人がカムチャツカ沿岸で漁区を借り受けての合法的な漁業が可能となったのは、1907年に調印された「日露漁業協約」以降である。以来、ソ連邦が日本人漁業者の雇用を中止した1933年まで、カムチャツカでは多くの日本人が合法的に

カムチャツカでサケ漁を行い、それらを塩蔵加工あるいは缶詰加工するといった季節的な労働に従事していた。その間、日本人はカムチャツカの先住民と数多く接触した。

経済的な接触のあり方としては交易をあげることができる。先住民はサケや毛皮を、日本人はアルコールや煙草などの嗜好品、米・砂糖などの食料品等を交換していた。また、商業的な接触のあり方としては、直接的、またソ連・ロシア企業を介しての間接的な接触関係があった。直接的には、大型の網の製造技術や漁船の操作などがある。また、間接的には漁網や漁船など日本製の漁業資材が影響し、網を使った漁法（カニの取り方や定置網の設置法等）や「サンパン」、「カワサキ」、「イサブンカ」などの日本製の漁船の名称が先住民の単語として残っていることに現れている。

（当館学芸課長 渡部裕・
学芸員 角達之助）

コンサート 国際音楽の日記念フェスティバル 2003 in 北海道 北方の歌の系譜を求めて—追分の旅・追分の母なる唄—

10/23(木)18:30- 当館ロビー



国際音楽の日記念フェスティバル2003 in 北海道「民族音楽コンサート—北方の歌の系譜を求めて—」が北方民族文化シンポジウムの関連事業として開催されました。「国際音楽の日」は音楽振興法(略称)によって10月1日と定められ、さまざまな記念事業の実施によって音楽を通じた国際相互理解を図ることがその目的です。当コンサートは今年度の記念事業として北海道各地で実施されたさまざまな音楽イベントの一つです。

このコンサートの大きな目的は、日本の民謡である追分とユーラシア大陸西部の南西部に位置するロシア連邦バシコルトスタン共和国の民謡とを聴き比べてみることです。追分は馬子唄からはじまった民謡で、悲哀をおびた調子で声を長く引いて歌うことが特徴ですが、各地にひろがるなかで越後追分や江差追分などさまざまな追分が生まれました。ところがユーラシア大陸のはるか西側に位置するバシコルトスタンの民謡にもこうした追分の特徴に類似したものがあることから、追分のルーツとしてユーラシア大陸の民謡が注目されるようになりました。

当日のコンサートは、こうした東西の民謡の類似性に注目してきた当館の谷本一之館長の解説を交えながら、唄や楽器の迫力ある演奏を堪能することができました。

開催日程 平成14年10月23日(木)
午後6時30分～9時
会場 北海道立北方民族博物館
ロビー

出演
【ロシア連邦バシコルトスタン共和国】
歌手 チャギウエフ・アルベルト
(ステルリタマク・バシキル・
ドラマ劇場所属)

クライ(縦笛)演奏
ヤイネットディノフ・イウライ
(バシコルトTV局所属)

【日本】
唄・三味線 久保田 隆洲
尺八 難波 鼓章
唄 桶野 芳枝
唄 桶野 瑞江

参加者 一般道民78名

主催 北海道立北方民族博物館 くじら協議会

当事業は平成15年度美術館等利用促進事業として、児童・生徒、市民と博物館のつながりを深め、さらに親子による博物館の利用を促進するための事業として実施しました。北方諸民族の伝統的な食文化を基調として、代表的な北方の料理作りの体験・試食、さらに、北方の食文化に関する展示や講演をつうじて、北方における資源利用を反映した食文化を紹介する内容としました。各事業内容は次のとおりです。

1. 展示

「パネル展—北方諸民族の食文化—」

サケや海獣類などを利用した北方諸民族の伝統的な食料資源と調理・加工など、また、モンゴルの北方など北部草原地帯の家畜文化における食料資源と乳製品の加工などに関する写真パネルや実物資料をつうじて、北方における人と自然の関係を紹介しました。

期 間 平成15年10月25日(土)～
11月9日(日)
会 場 当館ロビー



展示資料

①写真パネル

主に当館職員が北アメリカ、カムチャツカ、モンゴル等で撮影した食料資源、調理や料理などに関する写真51点

②実物資料

イヌイト、アイヌ、モンゴル等の食器、調理具など22点

③映像

ビデオドキュメント『捕鯨に生きる』
(1998年制作、40分)…11月2日のみ
展示

観覧者数 472名

2. 講演

「北方圏の食と地域の食文化」
講師 永島 俊夫氏
(東京農業大学教授)

日 時 平成15年11月2日(日)
午後1時30分～3時

会 場 当館講堂
参加者 8名



モンゴルやサハリン、あるいはウクライナの食文化を具体的に紹介いただき、また地元の食材とその加工などについてご講演をいただきました。

3. 北の食体験—作る・食べる—

北方の代表的な料理・食材を使った料理をつくる、あるいは試食体験として、ギョウザをつくる料理体験とクジラの肉や脂肪を使った試食、さらにスケトウダラを使った料理の試食による、食体験事業を行ないました。

1) 親子でつくるギョウザ教室
講師

栞秀梅(ラン シュウメイ)氏、
陳文紅(チン ウェンホン)氏

日 時 平成15年11月2日(日)
午前10時～12時

会 場 当館講堂・資料整理室
参加人数 26名



2) 北方の食体験

講師 下道孝禎氏、
三好弘美氏ほか

日 時 平成15年11月2日(日)
午前11時30分～午後3時

①クジラ料理：

クジラ汁、クジラ肉の竜田揚げ

②チゲ鍋(タラ鍋)

③クジラ肉竜田揚げ

調理場所 資料整理室、屋外テント

試食会場 当館ロビー、屋外テント

試食数 クジラ汁とチゲ鍋：303食

クジラ肉竜田揚げ：227食

合計530食



ウイльта刺繍展12/6(土) - 12/18(木) 当館特別展示室

ウイльта刺繍入門 12/7(日) 10:00 - 11:30 当館講堂

講師 小田切洋子氏(フレップ会)

今年度から、博物館施設の有効活用を目的としてロビーの一般開放を始めました。本展示はその第二弾として、フレップ会(網走市:小田切洋子代表)にウイльта文様の刺繍を施したさまざまな作品を展示していただきました。



ウイльтаは、狩猟・漁撈・トナカイ飼育を主生業としてきたサハリンの先住民です。明治38(1905)年にサハリンの南半分が日本領となった後、大正末から昭和初期に、大勢のウイльтаの人びとが敷香(現ポロナイスク)という町郊外のオタスという土地に集められ、そこで暮らすようになりました。オタスでは、おもに日本人観光客向けの土産物として煙草入れや財布、テーブルセンターに似た円形や四角形の敷物など、トナカイ皮の工芸品が作られました。それらには、渦巻き形やハート形を思わせるウイльта独

特の曲線文様が、絹糸で刺繍されています。今回展示された作品群は、こうしたウイльта刺繍の技術を受け継いだものです。

フレップ会は、網走市教育委員会が主催するウイльта講座の参加者によって1984年に発足したサークルです。北川アイ子氏(資料館ジャッカ・ドフニ館長)の指導のもと、ウイльтаのイルガ(文様)刺繍を制作して、今年で20年目を迎えました。ウイльта刺繍をおこなっている団体としては日本唯一で、現在も毎週火曜日に網走市のオホーツク・文化交流センター(エコセンター2000)に会員が集まって活動しています(「フレップ」とは、コケモモなど漿果・液果のアイヌ語名です。)

本展示には、フレップ会会員15名の皆さんが制作した132点が出品されました。作品は、テーブルクロスなどの大きなものからコースターなどの小品、壁掛けやアクセサリーなどの装飾品から小物入れ、名刺入れ、針刺しなどの日用品、上着や靴、手袋など、ウイльтаの伝統的な形式を模したのものから、暖簾や掛軸など日本の伝統的なもの、Tシャツやクッションなど現代的なものまで変化に富んでおり、それぞれに美しい色彩のウイ

льта刺繍が施されています。作品の種類、木綿やフェルトなど布地と刺繍糸の色、縫い目の大きさなどに制作者の個性が表現されているようでした。



また、展示に合わせ、12/7(日)には小田切代表ほかフレップ会会員の方々に講師をお務めいただいて講習会「ウイльта刺繍入門」を開催しました。当日は雪が降るあいにくの天候でしたが、網走市民を中心に9名の参加者がありました。ウイльта刺繍は二重のチェーンステッチと、その縁取りをする一重のチェーンステッチで構成されます。講習会では、10cm四方の黒いフェルトにハート型に似たウイльта文様の一部を刺繍しました。時間が限られていたため、時間内に完成させることはできませんでしたが、参加者はそれぞれの出来ばえに満足された様子でした。(学芸課 中田 篤)

企画展のご案内

セドナの箱 オーロラの下でシャマンと民話の世界から

開催期間/平成16年2月7日[土]-3月28日[日]

会場/当館特別展示室

会期中の休館日/月曜日

企画展観覧料/無料

「セドナの箱」は当館友の会季刊誌Arctic Circle(アークティック・サークル)に連載された大林太良初代館長のエッセイタイトルです。Arctic Circle発行50号を記念し、このエッセイを道標にしながら、北に暮らす人びとの独特な精神世界へご案内します。

関連講演会

『シベリアの猿蟹合戦』

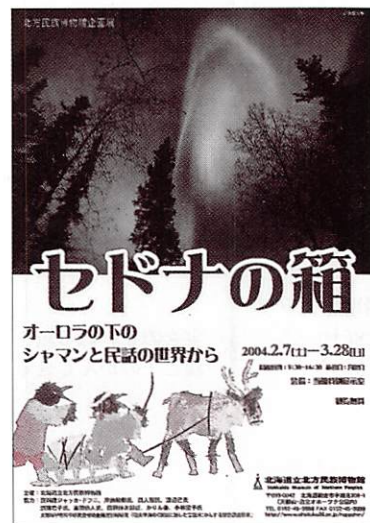
広がる民話の世界

日時:2月14日[土]午後1時30分-3時

会場:当館講堂 聴講:無料

※道民カレッジ連携講座1単位

講師:斎藤君子氏(ロシア民話研究家)



◆寄贈図書 2003.10-12

- 朝日新聞社 2003 「日本の歴史70」朝日新聞社
 解放出版社 2003 「人権でめぐる博物館ガイド Guidebook on
 Museums Related to Human Rights」解放出版社
 神沢利子 2003 「流れのほとり」福音館書店
 「銀のほのおの国」福音館書店
 「機海道」実行委員会 2003
 「機海道 八重山・宮古編」「機海道」
 実行委員会 辻井達一2003
 [日本語版:本とCD]「北方圏の自然と環境-エコハンドブック」
 [英語版:本とCD]Nature and Environment of the Northern Regions
 北方圏フォーラム (財)北海道環境財団
 津曲敏郎編 2003 「北のことばフィールド・ドノート
 18の言語と文化」北海道大学図書刊行会
 平凡社 2003 「日本歴史地名大系1 北海道の地名」平凡社
 「別冊太陽 日本の自然布」平凡社別冊太陽編集部
 池谷和信 2003 「山菜採りの社会誌 資源利用とテリトリー」
 東北大学出版会
*Reindeer Pastoralism among the Chukchi : Chukotka
 Studies No.1 : Chukotka Studies Committee*

◆行事報告 2003.10-12

コンサート

12/20(土) ロビーコンサート2003 青少年のための室内楽の夕べ



講習会

12/7(日) ウイルタ刺繍入門

◆行事案内 2004.1-3

企画展

2/7(土)-3/28(日) セドナの箱
 -オーロラの下のシャマンと民話の世界から-

講演会

2/14(土) 企画展関連講演会
 シベリアの猿蟹合戦-広がる民話の世界-

講習会

3/14(日) 作って歩こう・かんじき体験

博物館クラブ

2/28(土) 宝ものをいれる箱をつくろう
 3/13(土) 親子のかんじき歩き体験

◆みんぞく こうこ はくぶつかん in 北海道

- 10/1(水) 北方民族ニブフが使うニブフ語のポロナイスク
 (敷香)方言を絶滅から救おうと、2人の研究者
 が記録作業を進行中/D(夕)
 10/3(金) トドの頭蓋骨など珍しい骨の標本を集めた「骨
 の博物誌」が、斜里町立知床博物館で開催/Y
 10/4(土) 日本人類学会によりシンポジウム「古代人の病
 気と健康」が、歴史的杜カルチャーセンター
 で開催、伊達市/AS
 10/11(土) 「アイヌ研究の現状と課題」をテーマとした日本
 人類学会と日本民族学会の合同シンポジウムが
 伊達市で開催/Y
 10/16(木) アイヌの人が自ら企画・立案した工芸品展「ア
 イヌからのメッセージ-ものづくりと心-」が
 旭川市博物館で開催/Y
 10/30(木) 博物館網走監獄の開館20周年を祝う式典が網走
 市で開催/Y
 11/7(金) 北海道ウタリ協会釧路支部が「アイヌ神謡集」の
 編者で知られ、19歳で早世したアイヌ女性、知
 里幸恵さんの生誕100年を記念する「釧路の集
 い」を開催/A
 11/9(日) 釧路市の中心部、大町に残される古い土蔵を保
 存し、昔使われた生活用具やおもちゃなどを展
 示する歴史博物館にしようとする計画が、市民
 ボランティアにより進行中/Y
 11/15(土) 紋別海上保安部の開設50周年を記念し、間宮林
 蔵の測量図などを紹介した展示会が紋別市の北
 海道立流水科学センターで開催/Y
 11/22(土) 渡島管内森町の鷲ノ木5遺跡で、縄文時代前期後
 半(4,000年前)の道内最大級の環状列石(スト
 ーンサークル)を発見/Y
 11/23(日) 網走市教育委員会が史跡等整備調査委員会を開
 き、史跡最寄貝塚の整備基本構想の具体化につ
 いて協議/A
 12/12(金) 帯広市内大正3遺跡より、縄文時代草創期
 (13,000-10,000年前)のものと思われる土器片
 100点が出土/Y
 12/19(金) 十勝管内足寄町の27,000-24,000年前とされる地
 層から発掘されたクジラの化石がアカボウクジ
 ラ科のもので、同科としては世界最古になるこ
 とが、足寄動物化石博物館の調査で明らかに/AS
 12/22(月) 恵庭市のカリンバ3遺跡で発掘された鮮やかな
 朱色の漆製副葬品などを展示する「恵庭市カリ
 ンバ3遺跡札幌移動展」が札幌市の道立文学館で
 開催/AS
 12/24(木) 札幌市アイヌ文化交流センターが全面オープン/AS
 A:網走新聞 AS:朝日新聞 D:北海道新聞 Y:読売新聞

北方民族博物館だより

- 52号 -

2004年 1月23日

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 網走市字潮見309-1

(天都山・道立オホーツク公園内)

TEL 0152-45-3888 FAX 0152-45-3889

e-mail: hoppohm@ohotoku26.or.jp

ホームページ http://www.ohotoku26.or.jp/hoppohm/